vinetur

欧州のワイン生産量、2026年は4%減の見通し Copa-Cogecaが推計

2026年の欧州ワイン生産量は1億3,360万ヘクトリットルと予測され、過去5年平均を8%下回る見通し。世界の消費量は過去30年以上で最低水準となる

2026年11月16日（月）



Copa-Cogecaが11月16日（月）に発表した新たな推計によると、欧州のワイン生産量は2026年も減少する見通しだ。生産者は高温や干ばつ、需要の低迷に再び直面している。

欧州連合（EU）各国の農業団体や協同組合を代表する農業ロビー団体Copa-Cogecaは、2026/27年度のワインおよび果汁の生産量を1億3,360万ヘクトリットルと予測した。2025年の収穫量を4%、過去5市場年度の平均を8%下回る水準となる。

この数字は、気候変動の振れ幅が大きくなり、市場が大きく変化するなか、欧州のワイン生産量が緩やかな減少を続けていることを示すとCopa-Cogecaは説明した。同時に生産者は、消費の落ち込みや取引量の減少、価格への下押し圧力にも直面しており、特に赤ワインとロゼワインで影響が大きい。

EUでは引き続きイタリア、スペイン、フランスが主要生産国となり、3カ国でワインと果汁の生産量の82%を占める見込みだ。国別の割合は、イタリアが30%、スペインが27%、フランスが25%と推計されている。

イタリアは生産量4,110万ヘクトリットルの見込みで、引き続き世界最大のワイン生産国となる。前年の収穫量から7.6%減、過去5年平均から10%減となる。Copa-Cogecaによると、南部の州は干ばつと熱波の被害が最も大きく、中部や北部より減少幅が大きかった。シチリア州とアブルッツォ州では、特に大幅な減少が報告された。

フランスの生産量は3,380万ヘクトリットルと推計され、前年の収穫量から2%減、過去5作期の平均から15%減となる。Copa-Cogecaは、長引く干ばつや高温ストレス、ブドウ畑面積の縮小が引き続き生産を圧迫しているとした。また、地域による差も大きく、一部のワイン産地では大きな減産となった一方、夏の終わりの降雨に恵まれ、収量が良好だった地域もあったと指摘した。フランスでは大規模なブドウ畑の伐採計画も続いており、2024年以降にすでに4万ヘクタールが伐採されたのに続き、2026年には2万ヘクタールが伐採される予定だ。

主要生産国のうち、生産量が増える見込みなのはスペインなど少数にとどまる。スペインの2026年の生産量は3,450万ヘクトリットルと予測され、2025/26年度から3%増える。Copa-Cogecaによると、高温で水分ストレスが生じ、ブドウの粒重が減少したものの、ブドウの品質は高い水準が見込まれている。それでも、国内需要の減退と輸出の低迷が市場の重しとなっている。同団体によれば、スペインのワインの見かけ消費量は前年比8%減少し、特に赤ワインの価格下落が多くのブドウ畑の収益性を損なっている。

その他の生産国では、ドイツの収穫量は約700万ヘクトリットルと推計され、2025年から3.3%減少する。Copa-Cogecaによると、ドイツのワイン消費量は2026年第3四半期に、数量、金額ともに10%減少した。ポルトガルの生産量は約660万ヘクトリットルで12%増の見込み。一方、ルーマニアは450万ヘクトリットルと、2025年の収穫量から32%増え、最も大幅な増加を記録する国の一つとなる見通しだ。

生産に加え、需要の動向が業界の中心的な課題になりつつあるとCopa-Cogecaは指摘した。世界のワイン消費量は2億2,100万ヘクトリットルと推計され、過去30年以上で最低の水準となる。同団体によると、ワイン消費量は1996年から2007年にかけておおむね増加し、その後2017年までは比較的安定していたが、以降は長期的な減少に転じた。2022年以降、その減少はEU内外の主要市場で加速

している。

Copa-Cogecaによると、2000年には世界のワイン消費量に占めるEUの割合は約60％だったが、現在は約48％となっている。需要の減少はサプライチェーン全体に直接影響し、販売量を押し下げ、価格下落につながっているという。特にベーシックワインが大きな打撃を受けている。新興市場では引き続き商機が生まれているものの、従来ワインを多く消費してきた国々での需要減を補うには至っていないと同団体は述べた。

同団体が示した貿易統計にも、同様の圧力が表れている。2025年9月から2026年8月までの12カ月間に、EUからEU域外へのワイン輸出額は154億ユーロとなり、6.8％減少した。輸出量は3.3％減の2,750万ヘクトリットルだった。

ワインの大半のカテゴリーで輸出が減少した。保護原産地呼称付きワインは7.6％減、品種表示ワインは6.7％減、保護地理的表示付きワインは4.9％減だった。地理的表示のないワインはおおむね横ばいだった。増加したのはバルクワインとバッグ・イン・ボックスのみで、それぞれ5％、3.4％増加した。瓶詰めワインの輸出は7.5％減、スパークリングワインは6.2％減となった。

主要輸出先のうち、米国向けは15.3％減少した。カナダ向けは11％減、スイス向けは9.2％減、英国向けは3.9％減だった。ロシアと香港は数少ない増加市場の一つで、それぞれ17.5％、10.9％伸びた。EU域内貿易も低迷し、平均単価は上昇を続けたものの、金額は9.8％減、数量は13.4％減となった。

Copa-Cogecaのワイン作業部会会長、Luca Rigotti氏は、これらの数字は複数の方向から圧力を受ける業界の状況を反映していると述べた。欧州のワイン生産者は、予測が難しさを増す天候、紛争や地政学的緊張に伴う生産コストの上昇、ワイン消費の構造的な減少、新たな貿易障壁や市場参入障壁に直面しているという。

Rigotti氏は、業界はこれまで回復力と適応力を示してきたとする一方、生産者が変化する気候や商業環境に対応するには、効果的な市場管理手段と十分な支援が必要だと主張した。また、業界はイノベーション、持続可能性、品質への投資を続けるとともに、商品構成を広げ、新たな市場を開拓し、消費者、特に若い世代とのつながりを再構築すべきだと述べた。

会合では、EU共通農業政策の将来や、ワイン部門に特化した支援策についても代表者らが協議した。イタリアのLegacoop Agroalimentareの参加者によると、協議ではワイン予算の規模、共同拠出のルール、支援策の対象要件、自然にアルコール度数を低く抑えたワインの開発が取り上げられた。